

まえがき

フリードリヒ・ヘルダーリン 後期詩のテキスト編集・ 翻訳・注釈プロジェクトについて

矢羽々崇

フリードリヒ・ヘルダーリン（1770-1843）は、哲学者のマルティン・ハイデガーやジャック・デリダ、最近ではアラン・バディウの関心を引いてきたことで、また日本であれば伊東静雄や三島由紀夫などによる受容を通して、日本の読者層にも知られた名前だと言える。しかし、本当に読まれているのか。

確かに、1960年代に河出書房から手塚富雄らによる『ヘルダーリン全集』（河出書房新社、1966-1969年、以下「河出版『全集』」）が刊行された。また、川村二郎による『ヘルダーリン詩集』（岩波文庫、2002年、以下「川村訳『詩集』」）、10数編の詩の翻訳を含んだ高木昌史の『ヘルダーリンと現代』（青土社、2014年）をはじめ、いくつかの詩の翻訳も存在している。こうした先人たちの業績を踏まえつつも、今、新たな翻訳が求められる時期に来ている。その理由は、新たな詩テキスト編集の必要性であり、研究の蓄積を活かした日本語訳と注釈の必要性にある。

新たな詩テキスト編集の必要性

詩のテキストについて見ると、ヘルダーリンには、20世紀に出た複数の史的批判版が存在しており、さらにさまざまな編集がなされてきた。史的批判版とは、ある作家に関するすべての手稿や記録を網羅しようとする学術版であり、ヘルダーリンの場合、具体的には次の4つの版である。

- 1) 19世紀においてはヘルダーリンの精神の病の徴とされてきた1800年前後から後の詩、いわゆる後期詩に独自の価値を見出したノーベルト・フォン・ヘリングラートの編集による「ヘリングラート版(PA)」(1913-1923)
- 2) 実証主義的な厳密さをもってヘルダーリンの作品を単独で編集しようとしたものの、結果としてテキスト部しか出版されなかったフランツ・ツィンカーナーゲルによる「ツィンカーナーゲル版(ZA)」(1914-1926)
- 3) 階段方式と呼ばれる手稿の再現方法で画期をなし、史的批判版の模範のひとつとされたフリードリヒ・バイスナーによる通称シュトゥットガルト版(StA)（本号では責任編集者の名前で統一して「バイスナー版」と呼ぶ）(1943-1985)
- 4) 残されたすべての手稿を写真版として提示し、作品テキストの読みを読者に積極的に開くことで、新たな史的批判版の基本となったD.E.ザトラーによる通称フランクフルト版(FHA)（本号では「ザトラー版」）(1975-2008)

読者向けの新たな編集

そして現在、ヴァリエントの提示や写真版、さらにはオンラインで閲覧可能な草稿類などを通して、今や詩の生成の様子を研究者でなくても追跡・観察できる時代になった。ただし、史的批判版は、作家のすべての資料を網羅しようと完全性を目指すがゆえに、緻密であると同時に、一般読者にとっては情報量が多くなりすぎる傾向がある。そうした研究者向けの学術版としての史的批判版に対して、一般的な読者を想定して注釈も充実させた、研究者のみならず、一般の読者も措定した版が1990年代から登場してきた。注釈部に充実を見せるヨッヘン・シュミットの版 (KA)、テキストの編集に新たな工夫を見せるミヒャエル・クナウプの版 (MA)、そしてドイツ語テキストとイタリア語の翻訳を見開きで示すレイジ・ルイタニの『ヘルダーリン全詩集 (TL)』である (対訳版であるレイタニの版を他のドイツ語の版と同列に論じる理由は後述する)。

このように、ヘルダーリンは、テキストについての議論が非常に盛んな作家のひとりである。これだけ盛んに編集された理由は、とりわけいわゆる後期詩とされる、およそ1800年以降に書かれた詩の手稿を読み解くことが難しいためである。詩によっては、語句の読み取りはもとより、「ムネモシュネ (Mnemosyne)」に特徴的なように、何節構成と考えるか、第何稿と区別するのかまとめるのか、のように、版や研究者によって同じタイトルの詩で内容が異なるものが複数ある。あるいは「あたかも農夫が祝いの日に… (Wie wenn der Landmann am Feiertage …)」と「あたかも祝いの日に… (Wie wenn am Feiertage …)」を取り上げたい。これまで前者は、成立途中の段階としてヴァリエント (異同) として扱われていたのが、例えばクナウプ版 (MA) では独立した詩として扱われるようになった。あるいは「唯一者 (Der Einzige)」などであれば、これまで詩と関係のないメモ的な書き込みとされたものが、レイタニ版 (TL) では囲みに入れられることで、詩テキストとして従前提示されていた部分と一緒に読めるようになった。つまり今ヘルダーリンを読もうとすると、詩テキストとしてどの版を選ぶのか、どれがよいのか、という問いに、研究者であれば場合によって、解釈の前提となる詩テキストをどう編集すべきか、という問いに直面させられる。

なお、そもそも対訳版であるレイタニの版を、シュミット版 (KA) やクナウプ版 (MA) と同列に論じることに違和感を覚えるかもしれない。だが、レイタニの注釈はシュミット版 (KA) とはまた違う充実度を見せており、詩テキストの編集においてはクナウプ版 (MA) とは別の工夫を見せている。特に生成途上にある詩テキストという視点を重視することで、抹消されたり、書き足された詩句がそれと分かるように詩テキストとして読むことが可能となっている。こうした点においてレイタニの仕事は、テキストを日本語読者のために編集・翻訳・注釈するという今回のプロジェクトにおいて参照点として重要なのである。

レイタニについてももう少し論じたい。彼は翻訳するにあたって独自に詩テキストを編集し、テキストとしてドイツ語とイタリア語訳を対比し、詳細な注釈を施した。特に今回のプロジェクトで対象としている後期詩テキストの彼の編集においては、これまでの版であれば「編集テキスト (Edierter Text)」や「読みテキスト (Lesetext)」などと呼ばれる一般読者向けに整えた語句のみならず、すべてではないものの、生成途上でいった

ん書かれてから消されたり、他の語句に置き換えられた語句、あるいは同じ紙面に書き込まれた詩に直接関係しないと思われるメモ書きの語句も、詩テキストで同時に提示している。最近の編集文献学の大きな流れといえる生成途上の様子を重視したものであり、後期ヘルダーリンの大きな魅力としての未完性をより明確に示すことが可能になっている。何よりも、イタリア語を母語とするレイタニが、既存のドイツの版に依存するのではなく、翻訳者みずから手稿に向き合い、詩テキストを構築したことは、ひとつの画期をなしたと言える。その可能性と限界については冨塚祐の論考（冨塚、2024）を参照してほしい。しかしレイタニに先行するかたちで、フリードリヒ・ニーチェをイタリア人（Giorgio Colli und Mazzino Montinari）が、ジャイムズ・ジョイスをドイツ人（Hans Walter Gabler）が編集しているように、母語話者のみがテキスト編集をする時代ではなくなった。日本語を母語とする私たちが、特定の底本をもとにするのではなく、テキスト編集から詩と向き合うこと。そうした試みを始める時が来ている。

手稿と向き合うこと

もちろんこれまでの日本語への翻訳においても、手稿は参照されてきたはずである。しかし、全手稿の写真再現版を提示するザトラー版（FHA）および特にノート類がカラー写真で再現されたその「付録（Supplements）」（本体の巻は白黒写真）が出版されたこと、オンラインで閲覧可能な「シュトゥットガルト二つ折り本（Stuttgarter Foliobuch）」や「ホンブルク二つ折りノート（Homburger Folioheft）」（URLは文献リスト参照）など、日本にいても手稿を厳密に検討し、読み解くことが可能になっている。もちろん、写真での再現では、紙質の確認などはできない。それでも、オリジナルと同じサイズで写真再現版が作られたり（ザトラー版で後期詩の„Gesänge“第7、8巻が出版されたのは2000年）、デジタル版（「ホンブルク二つ折りノート」の公開は2020年）であれば部分拡大も可能となり、手稿の読み取りの可能性は、手塚富雄らによる河出版『全集』や川村訳『詩集』が出版された頃とは格段の違いを見せている。そうした可能性を、今回のプロジェクトでは最大限に活用している。

他方で、今回の増刊号が提示するものは、編集文献学一般における最近の理論的な議論をていねいに掘りあげての編集とは、残念ながら言い難い。現段階では、ヘルダーリンの手稿における詩ごとの原稿の様相の違いにそれぞれ向き合い、それをどう編集しどう翻訳するのか自体が大きな壁となった。ほぼ清書に近い段階の詩から、書き込みの錯綜の極みであるうえに、どこまでが同じタイトルで括れるのかという難問をかかえた詩まで、それぞれの詩の手稿に大きな違いがある。そのため、統一的な編集方針をまとめずに、それぞれの手稿に向き合うことになった。この点については、読者各位のご意見やご批判をいただきたい。とはいえ、これまでの既存の版を参照しつつも、手稿に立ち返る作業をする点において、各担当者が力をつくしている。また再現方法（記号）については、一定の統一がなされている（13～14ページ参照）。

新たな日本語訳とヘルダーリン理解を深める注釈

新たな翻訳が求められる別の理由は、翻訳の日本語である。すぐれた業績である河出

版『全集』からはほぼ60年の時間が過ぎた。格調高さを感じると同時に、訳語の古さを感じざるを得ない。現在の感性に基づいた日本語訳が望まれる。特に今回は若手の優秀な研究者たちが、研究を踏まえた新しい翻訳を用意してくれている。また、ヘルダーリンの詩の未完性や、「固い結合」と呼ばれる言葉同士がぶつかるような詩法などのオリジナルの持つ独自性も、シンタクスが異なる言語間でも限界はあるにしても、可能な限り再現するが望ましい。丸くきれいにまとまって分かりやすい状態ではない、テキスト本来の様子を伝えることを目標としている。

そして注釈も、論じられることが多く読まれることが少なかったと思えるヘルダーリンをより多くの読者に開くために重要な要素である。特に「ホンブルク二つ折りノート (Homburger Folioheft)」などに書かれた後期作品群は、その難解さゆえに詩の言葉を追うだけで分かりにくい。また、これまでの翻訳の注釈は、スペースの都合などで充分でなかったり、そもそも注釈がない場合もあった。現在の国際的な研究レベルを反映させた翻訳・注釈が必要になっている。今回のプロジェクトでは、これまでのドイツ語圏をはじめ世界のヘルダーリン研究の成果を参照し、かつ日本でも蓄積のある研究の成果を踏まえて、難解とされるヘルダーリンに接近できるように試みた。その質は高く、これまでの日本語での注釈にはない充実度を見せている。その際、編者による読みだけを示すのではなく、詩の理解のさまざまな可能性を開くことを意図し、複数の論点がある場合には、できる限りそれを提示することで、読者も多義的に読めることを目指している。編集文献学者のグンター・マルテンスがかつて書いたように、対話的な受容／読みは、「定義せず、固定せず、ダイナミックな緊張に貫かれる。多様な声たちの対立や併存のなかで、意味の諸関連、共鳴や対置の多声な織物が生まれる」(Martens, 1982, 455) からである。

対象とした詩とその編集の独自性

今回の増刊号では、ヘルダーリンの後期詩群のうち、「あたかも農夫が祝いの日に… (Wie wenn der Landmann am Feiertage …)」および「あたかも祝いの日に… (Wie wenn am Feiertage …)」(林英哉担当)、「唯一者 (Der Einzige)」(益敏郎担当)、「ゲルマーニエン (Germanien)」(小野寺賢一担当)、「ムネモシュネ (Mnemosyne)」(大田浩司担当)、「追想 (Andenken)」(矢羽々崇担当)を対象とした。このうち「あたかも農夫が祝いの日に…」と「あたかも祝いの日に…」は、自由律讃歌の起点となった重要な詩である。これまで日本の読者には、「あたかも祝いの日に…」のみが紹介されてきたが、今回、その前段階といえる「あたかも農夫が祝いの日に…」が、独立した詩草稿としてはじめて紹介される。またヘルダーリンが抹消した詩句「痛い (weh mir)」などが再現されることで、テキストの読みは変容する。「唯一者」「ゲルマーニエン」「ムネモシュネ」は、「ホンブルク二つ折りノート」に書かれたテキストであり、ヘルダーリンの詩を特徴づけるドイツとヘスパーリエン (西欧世界)、イエスと古代の神々、古代ギリシアといった重要なテーマが登場する。特に「ゲルマーニエン」は比較的清書に近い状態で残されており、ヘルダーリンの思想と詩想を知るのに適したテキストと言える。また清書に近いという特性を活かして、5ページにわたる詩のそれぞれのページに見られる文字の配置

や空白などの現況を再現しようとする新しい試みがなされている。「唯一者」と「ムネモシュネ」の2つの詩については、語句の錯綜が目立つ。しかしその未完性に大きな魅力があり、多義的に読む可能性が開かれている。「唯一者」は「ホンブルク二つ折りノート」以外にも手稿が残されており、本来であればそれらすべてを編集対象とすべきだが、紙幅の都合で今回は同ノートに書かれたテキストを中心に編集している。その枠内においても、テキストの流動的な変容可能性を示す新たな編集となっている。「ムネモシュネ」は、テキスト編集の面でも、解釈の面でも、ヘルダーリン研究のなかで常に議論的となってきた詩である。一般的に3節構成として提示されることが多いなか、今回の編集では4節として提示されている。「追想」は、おそらくは詩人が完成させた最後の詩と思われ、このなかでは唯一生前に発表されている（『1808年詩神年鑑』）。手稿に基づくことで最終第5節は、従来の11詩行ではなく、12詩行で編集されている。

プロジェクトの特徴

プロジェクトの特徴点をあらためて強調すると、次の2点を挙げることができる。

第一に、手稿の再現を意識しつつも、一定程度の読みやすさも担保するというテキスト構築の方針である。必ずしも完成した作品であるかのようにテキストを提示するのではなく、手稿中にみられる削除訂正などのさまざまな書き込みを取捨選択のもとで一定程度簡易的に再現し、執筆時における詩人の逡巡や、最終的に残された手稿の未完了性を示しつつも、翻訳可能な、ひいては研究者以外の読者も読むことができるテキストを提示することを目指している。その取捨選択の基準となるのは、第一には読解にかかわる重要度であり、第二は翻訳した際の日本語読者にとっての読みやすさである。冠詞や書きかけの単語などは、場合によって翻訳することができない。また、同じ語句を何度か書いては消すことがあったり、表面上は同じ語句がいずれも残されることがある。そうした解釈や理解にとって本質的ではないものと判断できる場合には、再現していない。そうした主観的な判断でテキストを決めてよいのか、という議論は当然ある。しかし同時に、編者の主観が反映しないテキスト編集もあり得ないというのが、現在のテキスト編集の基本的な考え方でもある。マルテンスは、「それ〔編者の主観：筆者注〕は、編集されたテキストを固定化するのではなく、自立的な読者が編集によって用意されたテキストや情報と創造的にかかわることで、編集されたテキストを開く」と論じている（Martens, 2010, 102）。ただしその主観性は、ヴァリエーションの提示が詩の読みを深めたり、多様にすることを意図している。

第二には、個々の詩をそれぞれの担当者が編集する方式である。手稿を再現するための編集記号はレイタニ版を参考にしたうえで、それぞれの詩の再現に相応しい方式を採用することで、若干の違いも生じている。今回紹介するそれぞれの詩のテキスト・翻訳・注釈については、これまで20回以上の研究会を行うなかで、それぞれの担当者が発表し、互いに批判したり、助言したりすることで充実を図ってきた。それでも、あえて厳密な統一にこだわらないのは、詩によって手稿の現況の違いが大きいためである。すでに一度清書されて、追加の書き込みもほぼ同時期だと判断できて読み取りやすいもの。いったん清書されたものの、異なった時期と思われる書き込みや抹消などが見られるもの。

清書といえるものがなく、テキストが次々に増殖していつているもの。手稿が一部しか残されていないもの。このような手稿の多様性により、方法を単純に同一化できず、統一的な手法を探っている段階である。もちろん史的批判版のように、全体を厳密に統一的にまとめるほうがよいのだろう。しかし、今回は実験的な性格のもと、今後の展開を考えるための土台作り、パイロット版として理解している。

翻訳では、研究会参加者同士で議論しながら、ヘルダーリン個人の用法や同時代のドイツ語のニュアンスを顧慮しつつ、訳語の質を高めようと努めた。これまでの訳業も参照させていただいた。

さらには、研究者でも読むに耐える詳細な注釈を施している。将来的に一般読者向けのテキスト・翻訳・注釈を発表する際には、注釈を簡略化して読みやすさを目指すことになろう。そのためには、最初から簡単な注釈ではなく、将来的に重要な論点を取り出すことが可能になるように、詳細なものが土台となるからである。またレイタニは、「私の編集した版が提供するような広範な注釈で、翻訳で縮小される多義性に関心を向けることが可能になる」(Reitani, 2020, 26)と述べ、翻訳と注釈の相互作用の可能性を示唆している。この視点は、今回のプロジェクトにとっても非常に有効なものと言える。それは、読みを一義的に固定するためではなく、多様な読みを可能にする。

各詩の構成

各詩の具体的な構成は、以下のようになっている。

1. 詩テキスト（ドイツ語）と翻訳の見開き対訳形式

未完のものは未完のものとして提示する。さらにヴァリエントは、基本的にテキスト編集紙面で提示する。その際には、手稿上のすべての語句や記号などを再現せず、翻訳や註釈のうえで重要な語句を残す。訳せないもの(冠詞、書きかけなど)は再現しない。その選択の判断は、各担当者の責任において行われる。上下左右の位置関係も可能なかぎり再現することを目指す、ページ配分の都合などで不可能な場合は除外する。編集記号については、最後にまとめたものを基本としている。

2. 編集注記

テキスト編集についての説明が記される。すなわち、手稿の現況についてや、関連する手稿、それぞれの詩のヴァリエントや書き換えなどの状況を明らかにする。

3. 概要

詩のおおまかな内容が紹介され、かつ読みの方向性や可能性が示される。

4. 語句注

詩の語句や表現の解説がなされる。多義性に向けて、そして他のテキストとの連関を意識できることを目指す。

編集記号（レイタニの用いた記号に準拠）

[...] 手稿中の空白

Wegen 作者による抹消箇所、しかしテキスト理解に重要

Der ungehaltene 抹消線が引かれているわけではないが、メイン部分に対応する別の語

句として読むことができるもの

|| 後の加筆段階で追加された語句で、テキストのメイン部分につけ加えられるべきもの

囲み/箱 批判的注釈もしくは加筆が断片的に留まったために、テキストのメイン部分には組み込めない文言

別フォント 他の草稿、ノートや文献などに由来するもの

[deutsch 詩行の表示がページの都合で2行にわたる場合

すでに触れたように、今回の6つのテキストの編集・翻訳・注釈は、その最初の成果を公表する中間報告である。非常に優秀な若手の研究者たちが、積極的にプロジェクトに取り組み、質の高い議論を繰り返したなかから生まれてきたパイロット版である。読者各位からの読者の忌憚のないご批判、ご意見を伺いたいと考えている。それにより、さらにプロジェクトを充実させたい。読者各位のご協力を心より願う次第である。